

今回私は、サークル活動の一環として秋田県藤里町で、傾聴ボランティアをさせていただきました。我々のサークルは毎年夏と冬の二回、サークル合宿という形を取り、藤里町に泊りがけでボランティアと課外学習をさせていただいています。

我々のサークルがこの年二回の研修で学ぶ対象は主に、地域、福祉、心理という三つです。具体的な学びの目的としては、秋田県藤里町は高齢化の進む過疎地域の一つですが、高齢化による若者の労働力不足問題に対して、若者の引きこもりの就労支援という切り口で成功を収めた、地域福祉において注目されている地域の一つであり、そうした地域×福祉というコラボレーションを直に見て勉強すること。また、地域性が生む地方に住む人間独特の心理と普段生活している東京の人間の心理を比較することや（地域×心理）、傾聴の中で高齢者のお話を聞き、相手の心の健康を考え、精神面での健康をケアするなど、高齢者の立場にたつてものを考え、理想的な福祉を考えること（福祉×心理）などを通して座学で学べる理論的なものを越えた臨床的な思考を養うことを目的としています。

また、今回は夏の研修だったわけですが、夏の研修にはとても大きな役割があると私は考えています。それは、地元住民の方や社会福祉協議会の職員の方々、役場の方々との交流です。もちろん、冬の研修でも交流させていただくのですが、冬は傾聴ボランティアに加え、除雪ボランティアを行うため、スケジュールが過密になり、地元の方とじっくりと話をする機会、意見を交え、信頼関係を構築する機会が少なくなってしまうのです。「地方の人間は閉鎖的で排他的である。」とよく言われますが、藤里町の方々自身もそのことを認めており、地方にそうした風潮が存在するのは事実であり、藤里町もその例外ではないようです。ですから、我々よそ者がボランティアをさせていただくためには、信頼関係を構築することが大切であり、その信頼関係をこの夏の間藤里町の方々とは築いておく必要があるのです。そうした大まかな目標を掲げ、今回、研修に臨みました。

今回の研修では、藤里町社会福祉協議会のデイサービスやグループホームに伺っての傾聴、社会福祉協議会が実施する出張の福祉サービス（元気の源さんクラブ）のお手伝い、地元の高齢者バレーチーム「熟年バレー」とのバレーの親善試合を兼ねた傾聴、秋田県藤里町北部地区の方との交流会、そして空き時間には一人暮らし高齢者の方のお宅に伺って傾聴をさせていただきました。

藤里町の実施する出張福祉サービスの一つである、「元気の源さんクラブ」では、「こみっと」と呼ばれる建物の一室を借りて、高齢者の身体機能の維持、健康寿命の延長などを目的として、体操やレクリエーションを定期的に行っています。

「こみっと」には、食堂があるのですが、その食堂は、先に述べた若者のひきこもりの就労支援の場となっています。そして、今回の研修期間中たまたま、NHKのある番組がこのこみっとにおけるひきこもり就労支援を特集するべく取材に来ていたようで、この取材に食堂で遭遇しました。このことから藤里町のひきこもり就労支援がとても注目されているということがわかると思います。また、その時、この取材に同伴していた社会福祉協議会の方とお話をする機会があったので、この就労支援に関してお話を聞くと、こうした

取材は珍しくないらしく、取材に限らず、日本中から大学教授などが視察に訪れるそうです。このこみっとにおける就労支援のようなものを藤里町以外でも行おうと考えている方が多いようです。

確かに、このように引きこもりを労働力として用いながら社会復帰を促すというシステムは画期的であるように思います。しかし、このシステムはどこでも適用可能でしょうか。私はそうではないと考えます。つまり、このシステムを一般化するのは難しいということです。

仕方がないことではあるのですが、こみっとの食堂は、「飲食店」としては質が低いといわざるを得ません。味は良いのですが、接客、サービスという点には苦言を呈するほかありません。今年の冬もこの食堂を利用させていた大のようですが、注文を取るのには時間がかかるし、間違いも多く、料理提供にもとても時間がかかるのです。うどん一つに大体30分くらいかかります。しかし、それは仕方がないことです。社会に対して長いブランクを持つひきこもりの方にとってこうした仕事は難易度の高いタスクです。しかし、その仕事をする場を与えるからこそ就労支援です。これは就労支援のための食堂であって、飲食店ではありません。利益を追求する必要はないのです。赤字だったとしても行政がカバーすれば済む話ですから。とはいえ、これを東京でやったらどうなるでしょうか。藤里町には食堂はこのこみっとの食堂を含めて3つしかありません。そこには東京のような飲食店同士の利益追求の生む激しい競争などは存在しません。多少サービスが悪くても、3つしかないのですから、飲食店として認められるのです。また、今回研修中に感じた藤里町の特徴として、時間の流れがゆっくりであるということも挙げられます。しかし、東京はどうでしょうか。並のうどんひとつに30分かける人がいるでしょうか。また、これは藤里町でも見られる現象なのですが、「こみっとで働いている＝ひきこもり＝社会のお荷物」といったような、負のスティグマが存在しており、一部の地元の方はこみっとで働いている人を良く思っていないようなのです。このようなスティグマがあってもなお、人が来るのは、上述の地方ならではの原因故なのではないかと思うのです。つまり、私が言いたいのは、こうしたこみっとと食堂のようなシステムは一部の地方でしか機能しないのではないかということです。食堂に誰も人が来ない時、その食堂ではたらくひきこもりの方たちの仕事に対する自己効力感は保たれるでしょうか。スティグマの中で働き続けることができるでしょうか。それらはとても難しいことのように思えます。むしろ、こころを折られて、また引きこもってしまうのではないのでしょうか。

また、こみっとで働く引きこもりの方々の中には、精神疾患を有している人も見受けられましたが、これは、なにもこみっとに限ったことではなく、引きこもりの方一般に見受けられるように思えます。ひきこもりという行動に至るには様々な経緯があると思いますが、一つ共通していえるのは、皆、程度の差はあれど、ある程度の社会に対する不安・恐怖を感じているということです。ですから、引きこもりの方が対人恐怖症・社会不安障害といった精神疾患を罹患している可能性は高いわけです。だとするならば、ひきこもりの

就労支援には社会的ソーシャルトレーニングなどの、心理的な援助が不可欠なのではないでしょうか。先の国会で、臨床心理士の国家資格化が決定しましたが、藤里町のような過疎地域では、都心よりも心理職という存在が認知されていないように思えます。しかし、上述の鶴のような支援の効率化、地域住民のメンタルヘルスのことを考えると、過疎地域にも心理職はおくべきなのではないかと思えます。

このように今回の研修では、注目されている藤里町のひきこもり支援の他地域に対する一般性の問題、過疎地域における心理職の重要性と、その不足といったことに関して気づきを得ました。

また、当初の目標だった、藤里町の方との交流と信頼関係の構築は、一人暮らし高齢者訪問や、社会福祉協議会の方との懇親会などを通して、十分にできたように思えます。そして、交流すればするほどに、我々のサークルと藤里町とのつながりの深さを実感しました。我々のサークルと藤里町とのつながりは、もうかれこれ10年以上のもので、年に二回訪れ、ボランティアをする。これが10年以上続いているのです。町には若い人間がいないことも手伝って、我々が藤里町を歩いていると「ああ、ごまちゃん（我々のサークルの名前）！また来てくれたのね。ありがとう。」と町中の人から声をかけられるのです。「地域の人間は身内にはとても暖かいけど、よそ者には冷たい。それは藤里町も例外じゃない。でも、ごまちゃんにはみんな温かい。ごまちゃんはもうよそ者じゃないんだろうね、でも、身内というわけでもない。ごまちゃんは藤里町にとっても不思議な存在で、そういう存在が、町の閉鎖性を少しずつ壊していくんだと思う。このつながりは藤里にとってとっても大きいんだよ。」社会福祉協議会の方が懇親会の中でおっしゃっていた言葉です。この言葉をかけていただいて私は、涙が出そうになるくらい感動しました。今まで、サークルの先輩方が見つないできたこのつながりを、後世にも残していきたいと、藤里の方の力になれば、と本当に思いました。

来年の冬、また藤里町に行かせていただきます。そのときは、今回の研修で得た気づき、学びを活かして、より藤里町の力になれるように日々精進していきたいと思えます。